

---

# 七夕・ラブ・ストーリー

葵（仮）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

七夕・ラブ・ストーリー

### 【Nコード】

N7142U

### 【作者名】

葵（仮）

### 【あらすじ】

内輪ネタです。

『唯一神を継ぐもの シャナなう』の霧雨霞と『魔法少女リリカルなのは』の偽リノ騎士の安藤響介の七夕イベント。 コラボあり何だかてきとうなノリでぼんぼん書いた感じです。

知ってる人は見てみると面白いかも！ 登場作品一覧 唯一神を

継ぐもの シャナなう 魔法少女リリカルなのは 偽リノ騎士

チートじゃ済まないシリーズ 魔法世界興国物語 白き髪のアリア

機工魔導師——enchanter——魔法少女リリカルな

のは、  
くちートな主人公の頑張り物語

(前書き)

内輪ネ夕

## 七夕

7月7日、七夕。

その昔、織姫と彦星という二人の純愛ラブストーリーがあったと伝えられている神聖な日。

そんな今日、ある場所で、二人は――

――天の川・新郎控え室――

「ついに……ついに……ううあう／＼／」

【ふう、ちょっとは落ち着いてくださいよ、響介】

「だってだって」

ついにこの時が来てしまった。

以前から作者同士の間である程度のこととは決まっていたそうなのだが、勿論この話を聞いたのは今日が初めてだ。

そう、それは昨日の夜――

畏無『おい、響介ー？』

響介『ああ？ 何だよ畏無』

畏無『明日さー、天の川行ってこいよー』

響介『ハア！？ 天の川！？』

畏無『いやいや、まだ続きがあるから』

響介『な……何だよ』

畏無『明日天の川で結婚式な。だから早く寝て早く起きて遅刻しないように行くぞー』

響介『……だ、誰の結婚式？』



エエエエエエエエ！？」

本格的に意味が分からなかった。

勿論、俺は今日が七夕で何かイベントがあるんだろうなとは予測していたけど……………

流石に、この事態までは予想できなかった。

まあ何はともあれ嫌な事ではない。嫌な事であるはずが無い。  
霞姉はそれこそ、俺の愛する人……………って自分で言ってて恥ずかしくなってきた／＼

コンコン

控え室の扉をノックする音。

「響介、いるか？」

……………ん、この声は要かな。

「どうぞー」

「ん、邪魔するわ」

やっぱり要だった。

「お前その服は……。ま、まあ似合ってるんじゃないか？ それにしても、よかったじゃねえか、響介。ま、行き成りなのはしょうがないんだけど、嬉しいだろ？ 第一、ここら辺の界隈じゃ、唐突なのは日常茶飯事じゃね？」

「服のことは言わないでくれ……。それに日常茶飯事って言うても……なあ……」

「そう気い負うなって。結婚なんて大したもんじゃねえぞー。ただ前の関係プラス結婚したっていう記録が残るくらいで、あんまり変わらんだろー。ま、強いて言えば合法になったって感じじゃね？」

「うわっ。今日の要、妙にテキトーだな……」

「だってな、今日は叶と一緒になー、家でだらしてる気だったのになー。行き成り呼び出されるからよー。それにこの話七夕と投稿日ずれてるしなー。まーいっかー」

「【メ、メメタア】」

「ま、そんなわけで精々気張っとけよー。ミスしないようになー。」

……あ、そうだ。霞すごいぞ、色々と」

「ちょ……！ お前新郎が見る前に花嫁見たのかよッ！」

「……冗談だ。ソレニ、オレハ ソンナコト シナイッテー。ナッ  
ハッハッハ！」

ジトー……………

「じゃ、また後でなー」

人のジト目を意に介さないとかどんだけだよ。  
ってかどんだけ叶ちゃん大好きなんだよ。親ばかだよ。……親ばか  
だったな、要は。

コンコン

……今度は誰だよ……………。

「安藤響介様、準備が整いましたので式場の方をお願いします」

どうやら係員の人のようだ。  
俺は席を立ち、ドアの方へと向かう。真っ白な——なんというか——

—忌々しいけど綺麗なやつを着て。

「……………なんでさ……………」

知らずの内、呟いていた。

右手にある物を持ち、左手に白いのを持ち、俺は式場へと向かった。

——天の川・新婦控え室——

此処は天の川に建てられた特設結婚式場。無論、私が作った。ほとんど人工星になってるけど。

そして新婦控え室の中で私は——

「うつひよ~~~~~！ ついにこの時がにゃああああああああ  
！！」

「こら、霞。女性がそんな言葉遣いをしてはいけませんよ」

「淑女たるもの、しっかりした言葉を使えよ、霞」

「いいんだいいんだ！ 今日くらいはいいんだ！ それにしても、二人ともお話に出てくるのは久しぶりだからね」。葵も書きにくい

って」

「メタにぐさつとくすることを言わないでください!」

「そうだぞ! こちとら気にしてるんだ!」

そう、何を隠そう、ロストと撫子。本当にお久しぶりの登場だ。スーパーサブレベルだ。

そしてお二人さん、紳士淑女の嗜み<sup>たしな</sup>としてその言葉遣いは許容できる範囲という事でいいのかな。

「まあ、今日くらいは少々の羽目を外しても問題はあるまい。なんにせよ、喜ばしいことだ」

「あの霞が……ついに……」

「こらこら二人とも、感傷に浸らないで」

「あら、いいじゃないですか。親代わりの身として嬉しいものですよ」

「うーうーバルバル」

「牛じゃないんですから」

「う、牛といってもただの牛じゃないんだからね! 乳出してるだけが仕事じゃないんだからね!」

「何をわけの分からん事を……」

うう……ここに来て気が動転しちゃってるなあ……。こんな姿響ちゃんには見せられないよ……／＼

今、私の服はもうウェディングドレス。頭に載せる……何ていったつけ。まあいいや、それだけつけていない状態だ。  
腕には青を基調とした腕輪。随分前に響ちゃんに貰った物だ。  
早く響ちゃんにこの姿を……はうう／＼

「ああ……ウェディングドレス……いいわあ……」

「ああ……霞のウェディング姿……いいなあ……私も……  
って、わ、私は一体何を……／＼」

「阿呆どもめ……」

「ねえ、ロスト！ いいと思わない？ このウェディングドレス！」

「ん……ああ、似合ってると思うぞ、うん。いやあ霞おめでとつ」

「胡散臭いなあ……。まあいつものことだし、いつか」

コンコン

そんな話をしていると、不意にドアがノックされた。

「はい」

「あ、霞さん。私です」

「あ、その声はアリ……いや、これが近頃流行のなんたら詐欺というヤツか！ そのドアの前にいるのは誰だっ！」

「失礼しまーす」

中に入ってきたのは、アリアちゃん。仕事虫をやっているいつもの違つて、今日はおめかししてきたみたい。ウエディングドレスではないけど、白いドレス風のワンピース。純白のアリアちゃんの髪と相まって可愛い……愛でたいくらい可愛い。それはともかくとして

……

「無視される方の気持ち考えた事ある！？」

「あ、はい」

「軽く流されたっ」

「ご結婚おめでとう御座います」

「スルーの嵐かつ！ ……………いいや。ま、籍は入れてないけどねー」

「というか、響介さんって結婚の適齢に達してないんじゃない？」

……ギク。

「もろじゃないですか……」

「もろだねえ。でもね、アリアちゃん……」

「何ですか？ モグモグ」

「って何食べて——うにゃーっ！」

アリアはちゃんが頬張っていたのは、テーブルに置いてあった苺のショートケーキ。

「そ——それは私が作ってこの後食べようと思っていた——」

「ハッ！ 私は何てことを！ 手が勝手に！ うーん、おいしい！」

「滅茶苦茶味わってるじゃないの！」

「お粗末さまでした」

「ってそっちが言つの！？」

「中々おいしかったです。ありがとございます、霞さん」

「もう何か……アリアちゃんどうしたのさ！」

「いーえー、別に。そのウェディングドレスが羨ましかった訳でもありませんし、この部屋からいい匂いの匂いがした訳でもありませんし、ちよつと姑みたいな事をしたかった訳でもありませんよー」

ジトー……………

「……オールダウト」

「いやあ霞さん、この度は本当におめでとう御座います。心よりの祝福と我が家で採れた苺を……モグモグ……差し上げ……モグモグ……ます」

「……なんか量が減ってる気がするんだけど……」

「そんなこと……モグモグ……ありませんよ……ごつくん。やっぱり苺はおいしいですねー♪」

「何かもう……アリアちゃん自分で食べちゃっていいよ」

「ええ！？　ほんとですか！　ワイ♪　モグモグ……それではまた後で……モグモグ」

アリアちゃんはそのままスタスタと廊下へと出ていってしまった。  
……何をしに来たんだあの子……。

「嵐のようでしたね……………」

「嵐というか何というか……………」

「ハア」

コンコン

「霧雨霞様、準備が整いましたので式場の方にお願ひします」

私は撫子にヘッドドレスを持ってもらい、式場へと歩みを進めていった。

——式場——

「まったく……………なんで俺が神父なんだよ……………」

そんな言葉を漏らすのは、御坂様。  
科学者である彼が何故、神父をしているかというと——

「それにしても……なあにが『お前神父っばいから神父やれよ。え？ 嫌だ？ ふーん、まあやっつけ』……圭のやつ……」

ガチャン

式場と控え室を結ぶ、新郎側のドアが開く。

「おい、新郎きたぞー」

要が気だるそうに襟に声を掛ける。

「ん、ああ。って……あれ……新郎じゃなくて――」

「ああ、見た感じ、新婦だな」

「……なんで」

「霞がそれにしたらしい」

「……………」

「ま、いいんじゃない？」

「本人は顔が真っ赤どころじゃないけどな。ってか、あれ。発火し

てるよな」

「青春してるな」

「……………そうだな」

それもそのはず。響介がその身を包んでいるのは

——純白の

——真っ更な

——ウェディングドレス。

「うう……………恥ずかしい……………」

更に顔を赤らめるもんだから、魅力というかなんというかが膨れ上がって、收拾が付かない位になっていた。

「……………何だか、反応に困るな」

「響介も大変だな」

「うおう、剣介！ いたのか」

要の後ろからボソツと呟いたのは、石神剣介。

「ひ、ひでえ！ ずっといたよ！」

「だってまだ喋ってすらいなかったじゃん」

「ちくしょう……orz」

「ま、響介もそんなに恥ずかしがる事無いよなあ。結婚式っていつでも、コラボ組みの内輪だし」

「なににせよ、子供ですね」

剣介の横からヒョイと頭を出したアリア・スプリング・フィールド。その手には、先ほど霞に御祝儀代わりにといつてもっていった筈の、苺の入っていた箱。よく見れば、アリアちゃんの頬には赤い苺の汁がついている。

「それをアリアがいうのか」

「ぶー、剣介さん。今私の体を見てから言いましたねー！ 女性にそういうことを言っではいけませんよ、メッです」

「母親かつ！」

「こらこら、二人とも喧嘩すんなよー。それに、ほら。本当の新婦もついたみたいだしなー」

バンツツ!!

耳を劈くような大きな音を立て、新婦側のドアが開けられる。  
開かれると同時に、音を通り越した”物体”が響介めがけて飛んでくる。

『超電磁砲』、磁石による反発を利用し、弾丸をマッハを超えた速度で撃ち出す砲撃。これを普通の人間が見ればそう表現するだろう。音は遅れてやってくる、とはよく言ったものだ。

「きよ~~~~~~~~ちや~~~~~~~~ん!!!!!! ふにや  
ああああああああああ!!!!!!」

「わッ! ぶっ!!」

抱きつ、チュッ。

「んんん~~~~!! んんん!!!!!!」

「ぶはあ!!」

「早過ぎんだよお前等ア！」

（チートとしては）温厚な方でもある棕が切れた。

「そこオ並べエ！」

「は、はひい！」

「面倒だしよく知らないから略式だ。二人とも、ここに未来永劫の愛を誓うか？ 答えは聞いてない！ さっさと交換するもの交換して、キスでも何でもしちまえ！」

「棕……大丈夫かな……」

「あいつも一応チーターだし、あの程度なら大丈夫だろ」

「そうだといいいけどなあ……」

「霞姉……これ」

といって、響介は両手を前に出す。

左手には、ウエディングドレスのヘッドドレス。

右手には、指輪の入った小さな、凝った箱。

霞はまず、左手のヘッドドレスをゆっくりと、響介の頭に載せる。

「響ちゃん……似合ってるよ」

「は、恥ずかしいだろ。ほら、霞姉も」

「ふふっ。撫子」

「分かっていますよ」

そういつて、撫子は響介に霞のヘッドドレスを渡す。

霞はひざまずくように、響介の前に屈む。

響介は、少し震えながらもそつと霞の頭にヘッドドレスを載せた。

「ほ、ほら。霞ね——」

「姉、じゃないでしょ？」

「……う、うん。……霞……指、出して」

「んっ……」

響介は、指輪を箱から取り出し、優しく霞の左手の薬指に嵌める。

決して派手でなく、逆に地味なわけでもない。霞の肌や髪の色に丁度マッチした絶妙な大きさ、色のダイヤモンド。

「……嬉しい」

「喜んでもらえて嬉しいよ」

「……うん」

「さあさ、花道だ！<sup>ヴァージンロード</sup> 人数は少ないけどまあいいだろ。みんな、道を作れー！」

そう指示するのは、要さんの生みの親、雨季さん。何だかんだで、この人が（なるう的に）一番年長なわけなので、当然のことだろう。

「いやあ、他作品同士のしつかりとした結婚式とは中々珍しいですね」

感慨に耽っているのは、アリアちゃんの生みの親、竜華零さん。人気作家さんである。基本毎日更新という脅威のお方だ。

「響介……リア充爆発しろ……」

「場を汚すようなことをいうんじゃない」（ゴスッ

「ぐはっ！」

剣介に殴られて気絶したのは、殴った当人の生みの親であるけーく  
んさん。……まあ仕方ない。

「響介——ついにお前も——爆発しろ」

「お前が爆発しろッ」（ゴスッ

「うばあっ！」

またもや剣介が殴ったのは、響介の生みの親、畏無さん。私のもつ  
とも古いなろう仲間でもある。ご愁傷様です。

「掠……やっぱお前薄いな……」

「フン！」

「のべっ！」

飛んできたのは、ぶっとい聖書。その凶弾に倒れたのは、生みの親  
の魚崎圭さん。何だか色々と酷い事になってる。

まあ、それはどうとしても——

「リア充爆発しろッ！」

「「「あんたもかよ！」「」」

だってそう思ったんだもの。いわなきや損損。

「みなさんみなさん、ほらっ山場ですよ！」

アリアちゃんの鶴の一声で場が静まる。

響介と霞は花道ヴァージンロードを通り抜け、式場のもう一つのステージへと歩いていく。

「それじゃ、誓いのキスでもなんでも」

「響ちゃん……」

「霞……」

一瞬、ホンの一瞬。チュっといった感じで少しだけ唇を触れ合わせる。

まあ、此処でよく考えてみると、だ。

響介は、ウェディングドレスを着ている。

当然、霞もウェディングドレスを着ている。

この二人がもろそち系にみえ——いや、今は……いいか。茶化す気分にもなれない。

「ブーケトスです！」

アリアちゃんが喜々とした表情で言う。

目線の先は空。まあ空といっても、天の川につくつた島の上なので空を見ようとすれば宇宙が見えるわけだ。一種、宇宙<sup>そら</sup>ではあるが。

「……は？」

ブーケトスについての詳細は各自で検索して欲しい。

ただ、おかしい事は。

ブーケトスとは本来一つのはずだが。

何故か、全員分のブーケが舞い上がっていた。

それぞれのブーケは各々の手元に納まる。

あ、要君の手元には無かった。  
一応結婚してるしね！。

「アリアちゃんはフェイトと！ 剣介はまあ……誰かと！ 棕は……  
…美少女軍団と！ 要君はいいや！」

「……ま、いいけどな」

「作者陣は愛すべき人を見つけてね！」

「余計なお世話じゃッ！」

「みんな、今日はありがとう！ 私達はこれからもラブラブに生きて  
いきます！」

「ば、バカっ！／＼／」

「それではこれからも、皆さん、末永くお願いしちゃっよッ！」

その夜、朝になるまで飲み会。

勿論、未成年陣は流石に酒は飲んでいない。法律違反だしね！

全員酔いつぶれ、周りが静かになった後私は、ボソツと心の嘆きを漏斗してしまった。

「はぁ……リア充になりたい……」

私の呟きは、天の川の星の輝きと、宇宙に漆黒へと飲み込まれていった。

†事後談†

「ねえねえ響ちゃん」

「な、なんだよ霞姉」

「……姉？」ジト

「……何だよ霞」

「大好き」

「俺も」

「ふふっ」

「ははっ」

「またね、響ちゃん」

「ああ、いつてらっしやい。霞」

「私——帰ってきたら響ちゃんとのんびり余生を過ごすんだ……」

「フラグ立てなくていいから。それに、俺の自慢の嫁さんが負けるわけ無いしな」

「そうでもないよー。きっと何処かには私よりもっともっと強い人だっているよ」

「そっか。でも、負けないでくれよ？」

「当たり前じゃない。私、主人公よ？」

「それもそうだ」

「勝つて——くるね」

「ああ、分かってるさ」

そっぴい残し、霞は、霧のようにその場から消えた。

「俺にはよすぎる嫁さん……だな」

響介はリア充になった。

七夕・完

（後書き）

如何でしたでしょうか？

愛とかそういう話苦手ですが書いてみました、頑張りました。

場所としては、天の川。

そしてその天の川の近くに建てられた結婚式場。

天井は控え室以外屋根なし。

式場には二つの段があり、片方で指輪の受け渡しなどを行い、ヴァージンロードを通ってもう一つの方で誓いのキスをするという感じ。建物の外は一面花が咲いている。

ああああ、リア充になりたいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7142u/>

---

七夕・ラブ・ストーリー

2011年10月8日11時36分発行